

座いませう。私は自分の預つて居る子供を、どうかして、よく愛し、よく教へ、よく導くことが出来るやうに、そして自分の天職に忠實であるやうに毎朝祈つて、漸く其の日を過して居るやうな譯で御座います。

皆様にも、私と同様な感想を御持ちになつて居られるか、どうかは知りませぬけれども、どうせ微力な私等には、表面に現はれるやうな著しい

冬季と子供の衛生

此の頃、小兒の強壯と云ふことが、大分はやつて來まして、成るだけ子供を平生から強壯にして置く、結り寒風に慣せたり、薄着をさせて置いたりするやうなことが、其の目的の爲めに勵行されて居るやうであります。これは吾々小兒科から云

仕事は、さう易く出来るものではありません。たゞ自分の行くべき道を考へ、自分を守つて、其の仕事に忠實な心掛けを持つことが、私等には一番大きな仕事と考へるのであります。

これが私の取り留めのない懺悔で御座います。何か御話しせよと云ふことでしたが、別に大した考へもありませんので、これを申上げた譯で御座います。(文責在記者)

醫學士 唐 澤 光 徳

ひますと、大分其の濫用があつて、其の爲めに反つて悪い弊害を醸して居るやうな點がないとは云へないのであります。其の重なる二三を申して見ますと。

第一 冷水摩擦法と冷水浴

であります。これは此頃餘程盛んに行はれて居るやうに見受けます。これは子供の皮膚を強くして寒風に堪え、寒胃にかゝらないと云ふ風な意味から、一般に行はれるのでせうが、然し大人乃至大きい強壯な子供には、これ等のことを習慣性にして置くのは、或は體を強壯にさせるかも知れませぬが。小さい子供には餘程考へものであります。先づ私等の經驗から見しても、さう云ふ風な小さな子供に冷水摩擦を行つて居らるゝ家庭と、さうでない家庭との子供を比較して見ますのに、寒胃にかゝる度合が別に變りさうにもないのであります。のみならず、時に依ると不完全な家屋の中で寒風にあひながら體を拭うやうなことがある爲めに、風を引き易いやうな傾があるのです。なほ又、子供の厭がるのを無理に勵行する爲めに、子供の精神状態が悪くなると云ふやうな報告もある位であります。少くとも満七歳以内の子供に、

此の方法を勵行すると云ふことは、餘程考へものであらうと思はれます。

第二 寒風に慣らすと云ふこと

これも一種の流行となつて居ります。家にばかり居て、暖い空氣の中ばかり育つて居て、たまに外に出ると、直ぐに風を引くと云ふやうな考へから、どんな子供も、どんな健康状態にある子供でもかまはず、寒い時も、風の吹く日も、成るだけ戸外に出して、寒い風に觸れさせる、寒い空氣に慣れさせると云ふ方法をとつて居らるゝ家庭も大分見受けられるのですが、これも考へもので、子供が極く強壯な體ならば、風のない暖かな日に外の空氣に觸れさせるのも害はないでせうが、小さい哺乳兒を、これから先き北風の寒い、乾燥した處に出して、態々吹き晒らさせると云ふことは、一面からは成る程、寒風にならさせる利益があるかも知れませぬが、一面から見ますと、立派に寒

胃や氣管支加多留を起させる動機になるのであります。これが爲めに弱い哺乳兒になりますと、將來、強壯になる習慣が得らるゝ處か、重い氣管支加多留等に罹つて、忽ち天國へ上るやうなことがないとも云へませぬ。

第三 薄着の習慣

前に申したこと、同じ關係は、例の薄着であります。子供を餘り大事にし過ぎて、厚着をさせるから、小さい子供の皮膚が弱くなる。厚着の爲めに汗をかきますから、直ぐに風を引き易いなど、云ふ風に考へて、成るだけ小兒は薄着をさせなければならぬと云やうな考へも行はれて居ります、これも子供の年齢に依ること、どんな子供に對しても一様に有効であるとは申されないものであります。も早や満五歳以上にもなつて、風を引いても、氣管支加多留になつても、命に關係がないやうな年頃になつてからでしたら、或は薄着も強壯

の習慣をつける爲めにはいいことかも知れませぬが、これより以下の年齢、殊に哺乳兒などの時機には、日本の家屋が空氣の流通がいい爲め、言ひ換へると、障子からも風がよく入るし、疊の透間からも風がよく入る爲めに、室内の温度の差が、晝夜餘り劇しいやうな處では、容易に氣管支加多留を起し易い恐れがあります。

吾々の方から申しますと、少くとも哺乳兒時代、及びこれに近い小さな子供には、薄着よりは厚着ぞんざいに思ひ切つたことをするよりは、叮嚀に取り扱ふて置く方が、命に關する危険が少いやうであります。詰り哺乳兒乃至小さな子供を北風に吹き晒したり、水を浴びさせたり。薄着をさせたりするやうなし方は、所謂獅子の子を谷へ落とすやうなし方あります。さう云ふ昔のスパルタ流のやり方は、國家全體の上から申せば、弱い子供はズン／＼これに堪えないで死んでしまい、強壯な子

供ばかりが後に残ることになりますから、至極結構かも知れませぬが、一軒の家族から考へて見ま

ほんだはらの話

したならば、どんなに不幸なことか知れないのであります。(談、文責在記者)

保 井 コ ノ

一月のお飾りの一つとしてある「ほんだはら」について私は少し書きたいと思ひます。

「ほんだはら」は、日本の沿海到る所として其種類を産せない所のない海藻であります。我國では古くから、知られて居たもので、此種類に造詣の深い理學博士遠藤吉三郎氏は我古語にある「なりのそのはな」(莫語花)を此藻類の名稱であると申されて居ります。

藻の類は三大部に分たれて居りまして是等は、各其色を異にして居りますから、それによつて、紅藻類、褐藻類、綠藻類と唱へられて居ります。

「ほんだはら」の類は此内の褐藻類に屬するものでありまして、海岸で海水の漸く達する位の場所から餘り深くない海中に生へて居ります。

元旦の飾りに用ふる「ほんだはら」は、乾かしたものでありまして海中にある時は褐色を致して居ります。是は此植物の細胞の中に褐藻素と申す色素を持つて居りまして、普通の植物の葉の細胞内にあるのと等しい葉緑素の持つて居る色を隠して居る爲であります。乾いたものでは褐色素が薄くなる爲に綠色を顯はして參ります。

此植物は其體の最下端は圓盤の形をして海中の